目　次

第1章　発達を捉える視点 4

≪第1節　子どもの発達を理解することの意義≫ 4
≪第2節　子どもの発達と環境≫ 4
≪第3節　発達理論と子ども観≫ 6

第2章　生涯発達 12

≪第1節　初期経験の重要性≫ 12
≪第2節　胎児期及び新生児期の発達≫ 17
≪第3節　乳幼児期の発達≫ 20
≪第4節　学童期及び青年期の発達≫ 29
≪第5節　成人期及び老年期の発達≫ 32

第3章　子どもの精神保健とその課題 35

≪第1節　子どもの生活・生育環境とその影響≫ 35
≪第2節　子どもの心の健康に関わる問題≫ 36

第4章　子どもの実態に応じた発達や学びの把握 41

≪第1節　保育所保育指針 ― 子どもの発達≫ 41
≪第2節　子どもの生活や遊びと学び≫ 43
≪第3節　子どもを理解する方法≫ 45

第5章　子どもの理解に基づく発達援助 47
≪第1節　発達の課題に応じた関わりと援助≫ 47
≪第2節　特別な配慮を要する子どもの理解と援助≫ 48

※　各四角の枠内の同じ記号（A、B、C・・・）の（　　）には、同じ語句が入ります。

＊　弊社の許可なく、個人的なご利用以外の目的でこのＰＤＦ教材を印刷・複製することを禁止します。
また、ご自身でこのＰＤＦ教材を紙媒体に印刷し、弊社の許可なく頒布し、またはフリマアプリ・ネットオークション等に出品することは、弊社の知的財産権を著しく侵害する行為であり、これを固く禁止します。

第1章　発達を捉える視点

≪第1節　子どもの発達を理解することの意義≫

1	「保育の心理学」を学ぶ目的は、保育との関連で子どもの（　A　）の過程や（　B　）の過程を理解し、子どもの心身の状態や行動等を把握する技術を高め、子ども理解に基づく適切な（　A　）援助を行うことにある。	□□□
2	一般的に、身体が形態的に大きくなることを（　A　）といい、精神面および運動面での機能的成熟のことを（　B　）という。	□□□
3	**【発達の原理】** **発達の**（　A　）**性**：発達は飛躍的に起こるのではなく、（　A　）的、漸進的に起こる。 **発達の順序性**：発達は一定の順序で起こる。 **発達の**（　B　）**性**：発達は一定の（　B　）性をもつ（頭部から尾部、中心部から周辺部、未分化な全体的運動から分化した個々の運動へ）。 **発達の**（　C　）：発達には一定の（　C　）がある。 **発達の**（　D　）**性**：発達には（　D　）性がある（第１反抗期と第２反抗期の現象など）。 **発達の**（　E　）：発達には（　E　）がある。	□□□

≪第2節　子どもの発達と環境≫

1	ブロンフェンブレンナー（Bronfenbrenner,U.）は、発達しつつある子どもは「入れ子構造」になった（　A　）システムの中にはめ込まれていると述べ、発達の（　A　）を５つのシステムに分類した。（　A　）システムは、子どもを中心に考えたとき、子どものごく身近な環境である（　B　）システムを中心とした「入れ子構造」をもち、相互作用的に働くとしている。	□□□

9	新生児は、聴こえているというだけではなく、音や声を（　Ａ　）して聴き取る能力もある程度備えている。 また、新生児は、母語にない音でも識別できるが、次第に育った言語環境の影響を受け、母語にない音の識別力は低下し、生後８か月頃には母語の識別に特化される。	□□□
10	新生児期には、自分の母親などの独特の調子やリズムの話しかけに同調して身体を動かす（　Ａ　）がみられる。このような現象を、コンドン（Condon,W.S.）とサンダー（Sander,L.W.）は、（　Ｂ　）とよんだ。	□□□
11	子どもがＮＩＣＵ（新生児集中治療室）に入院したり、母親が病気になったりして、初期接触ができない場合もある。そのような状況について、（　Ａ　）は、初期接触は親をよい出発点に立たせるのに役に立つが、親子の健全で豊かな愛情ある関係を発達させるために不可欠なわけではなく、親子の間の愛情は（　Ｂ　）的関係の成果であると述べた。	□□□
12	ローレンツ（Lorenz,K.）は、身体に比して大きな頭、丸みをもった体つき、顔の中央よりやや下に位置する大きな目といった赤ちゃんの身体的特徴が大人に養育行動を引き起こさせるとし、そのような特徴を、（　Ａ　）とよんだ。	□□□
13	（　Ａ　）とは、広義では、心と体が触れ合うスキンシップ（タッチング）を中心に親子の絆を深めることを意味するが、具体的には、母親を中心とした養育者が、子どもを見つめ語りかけながら、素肌に触れる、なでる、マッサージをするといった手技を行うことをさす。（　Ａ　）によって、子どもの情緒が安定するという研究が多く報告されている。	□□□
14	（　Ａ　）とは、出生直後の一定期間、有袋類のカンガルーのように素肌に子どもを抱いてケアするこという。カンガルーのように、母親のお腹の部分に、肌と肌が触れ合うように新生児を密着させて抱くことで、体温保持効果だけでなく、無呼吸を減少させる効果、母親の子どもに対する（　Ｂ　）を増加させる効果などがみられるとされる。	□□□

4	レイヴとウェンガー（Lave, J. &Wenger, E.）は、（　A　）制度のように参加を通して学ぶことを（　B　）とよんだ。具体的には、保育所に途中入所してきた子どもが、活動や場にその子なりに参加し、他の子どもたちの遊び方を観察していくうちに、次第にその保育所での過ごし方、生活や遊び、そこでの人間関係など、多くのことを学んでいくような様をさす。	□□□

≪第2節　特別な配慮を要する子どもの理解と援助≫

1	**保育所保育指針 第１章 ３　保育の計画及び評価** **⑵　指導計画の作成【抜粋】** キ　障害のある子どもの保育については、一人一人の子どもの（　A　）や障害の状態を把握し、適切な（　B　）の下で、障害のある子どもが他の子どもとの生活を通して共に成長できるよう、（　C　）の中に位置付けること。また、子どもの状況に応じた保育を実施する観点から、家庭や関係機関と連携した支援のための計画を（　D　）作成するなど適切な対応を図ること。	□□□
2	特別な配慮を必要とする子どもの個別の指導計画を作成する際には、（　A　）を踏まえて、その子どもにとって（　B　）となっていることが生じやすい場面や状況、その（　C　）などを適切に分析する（保育所保育指針解説ｐ57）。	□□□
3	**保育所保育指針 第３章２　食育の推進** **⑵　食育の環境の整備等【抜粋】** ウ　体調不良、（　A　）、障害のある子どもなど、一人一人の子どもの（　B　）等に応じ、嘱託医、かかりつけ医等の指示や協力の下に適切に対応すること。栄養士が配置されている場合は、（　C　）を生かした対応を図ること。	□□□